

新聞を活用するなかで、自分なりに考え、 判断しながら視野を広げていくための指導のあり方

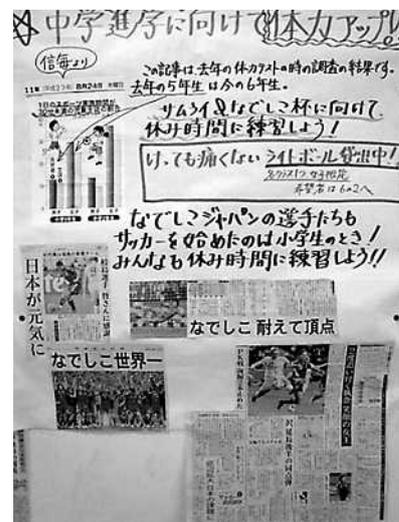
指定校 2 年次 安曇野市立三郷小学校 宮寄 賢一

1 本校の N I E の現状

前年度は、道徳「家族の臓器提供を求められたらどうするか～臓器移植改正法～」で、賛否それぞれの立場に分かれての話し合い活動を行ったが、いくつかの新聞記事の記述を自分の意見・考えの根拠とし、自分の立場で話し合うことができた。教師が、児童に切実感もたせることができる記事を選択し、それをもとにして考えさせたことで、生きることへの考え方を深める学びができたと考えられる。

本年度は、N I E 指定校 2 年次にあたる。各教科・全領域において、N I E が児童の学習活動にどのような役割を果たせるかを検討し、できる範囲で学習に新聞を活用してきた。日常的に新聞にふれるということで、高学年では、新聞スクラップ活動、校長による「新聞で学ぼう」のコーナーの常設と掲示、6 学年のサッカークラスマッチへの動機付けへの記事活用、子ども新聞コンクールへの 4・6 年生の出品等の活動を行ってきた。

こうした新聞の活用を通して、日頃目を向けなかった新聞記事に興味・関心をもつ子が少しずつ増えてきていると思われる。反面、教師の側で活動を仕組まないと新聞へのかかわりが見られない現状もある。



2 N I E のねらい

- (1) 言語活動の充実を図ることができる。
- (2) 話し合い活動を充実させることができる。いろいろな立場に立って、一つの課題について自分の考え方を、根拠をもって話すなかで、さまざまな考え方、思いや願い、生き方があることを知ることができる。
- (3) 社会的事象をもとに自分のもつ社会認識を深め、広めることができる。
- (4) 情報をもとに追究課題を見出し、自分が考え、判断したことを、自分なりの表現方法で発信することができる。

3 研究の成果

- (1) 事象と事象の有機的なつながりに着目して社会的事象をとらえられる子どもへ

前年度は、N I E 指定校として、研究テーマ「社会と自分とのつながりの役割を果たす新聞」を設定し、新聞を通して、広く社会と自分自身とのつながりを模索することを柱に、教育活動全般において実践を重ねてきた。そして、児童が意欲的に取り組む授業の進め方と教材の開発を重点にした研究が進められた。新聞記事は、「実際に身の周りの社会で起きている事実」であり、そのコメントや記述は児童が切実感をもって考え、判断するための根拠となり得るとして、その有用性を位置づけ、人が生きることへの考え方を高めるために効果的に活用することができた。

新 C S では、基礎・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力を育む学習活動を通して確かな学力を育成することと言語活動の充実が重要視されている。

本校の子どもたちの学ぶ様子を見てみると、自分の考えを持ち、それを表現しようと努力

しているのだが、自分の考えの拠りどころを明らかにして、多面的・多角的な視点・観点から判断して表現するという事は未だ十分とはいえない実態にあると考えられる。小学生であるから、当然のことながら、思考・判断するために子どもたちが持つ社会認識の多くは、経験済み、既習のことがらに限られ、社会的事象を正しく理解しながら、よりの確に判断することは難しい状況にあると思われる。また、事象のある一面を理解しても、それらが有機的につながっていることには目が向けられないため、社会的事象を確かな目でみて、考えることも難しい。

新聞を学習に取り入れて学習効果を上げるNIEの学習の目的は、現在の世の中が見えてきたり、社会への関心が高められたり、さまざまな問題解決のための思考力、判断力、表現力が培われたりすること等にあると考えられている。NIEを取り入れた学習において、多面的・多角的なとらえをしながら問題解決に向けた学びを行っていくことで、本校の研究テーマである「できた・わかったという喜びを感じながら」、「自分の考えや思いを表現しよう」と、学習に取り組む子どもを育てることができると考え、NIEの実践を積み重ねてきた。

(2) NIE実践の内容

① 教科・領域におけるNIEの実践を図る

教科・領域において、どの場面で、新聞をどのように活用すればよいか、活用することで学習効果を上げるよさは何か、取り入れる上での課題は何かを各学年で検討し、その実践を図ってきた。具体的な活用については、活用の目的とねらいを明らかにして学習活動に取り入れてきている。

② 新聞を活用した学習をすえていくために考えていきたいこと…本校の実践を通して

目的、ねらい	具体的な活用	活用することのよさと課題
教科学習の既習内容の理解を深め、発展的な学習に取り組む	1年国語：ことば探し 生活科との総合的な扱い 2,3年国語：漢字探し 3,4年算数：大きな数、一億をこえる数	○学習した内容について、新聞の豊富な内容を資料として、発展的に学ぶことができる。 ○学習した内容への関心・意欲を高められる。 ○既習の言葉や文字が新聞に使われていることを認識し、それをもとに新聞に興味をもつことができる。 ●既習、既知の内容でない場合、小学生にとって新聞の文字や内容についての学習は、つまりきが予想されるので、扱い内容を精選したり、発達段階に応じて、語句についての注釈や説明を加えたりすることが必要となる。
学習のねらいにそって子どもの理解や考えを多面的、多角的にするための新たな視点を提供する	道徳(3年以上の各学年)	○ねらいにそって資料の価値を分析したうえで、補助的な資料として提示することで、今までもっていた認識に対し、新たな視点があることに気づき、考えを深める端緒とすることができる。 ○自分たちの生活や環境と異なる様子を知る中で、自分たちの立場や生活の仕方を考えることができる。 ●資料の分析が明確でないと、焦点化されず、資料の価値を十分に感得させることができない。

<p>新聞そのものについて学び、その構成を学んだり、新聞づくりをしたりする</p>	<p>4年国語：新聞をつくろう 4年国語：仕事リーフレットを作ろう 5年国語：新聞を読もう 6年総合：新聞コンクール</p>	<p>○新聞そのものよさや価値、活用の有用性に気づき、その活用を図ろうという意欲をもつことができる。 ○新聞づくりの活動を通して、相手意識や目的意識をもった文章の書き方を学んだり、取材を通して人との主体的な関わり方を学んだりできる。 ○5W1H、文体の統一など、伝えるための文章の書き方を体験できる。 ●取材、紙面づくりは扱い時間が多くなりがちなので、綿密な単元計画を立てねばならない。</p>
<p>社会的事象と向かい合い、人の生き方や命などについて学ぶことで、自己の生き方について考える</p>	<p>道徳(3年以上の各学年) 総合的な学習の時間</p>	<p>○子ども自身がもっている社会認識に対して、新聞記事によって社会的事象を正しく理解させる。自分と似かよった発達段階にある人の考え方や生きる姿についての記事を選択するなど、問題を自分自身のこととしてとらえさせるための手だてが必要となる。 ●新聞記事を自分とかけ離れた人の出来事として受け止めさせてしまうと、心をゆり動かすことができず、浅薄な学びとなってしまいう可能性が高い。</p>
<p>学校生活における生活上の課題について、話しあうための資料とする</p>	<p>特別活動</p>	<p>○日常生活における生活上の諸問題について考える糸口として関連あるタイムリーな新聞記事を参考にし、自分たちの課題と重ね合わせる。問題の解決や改善に向けた話し合い活動を通してよりよい生活や人間関係を築こうとする態度を育むことができる。</p>
<p>目を向けることのなかった社会的事象にふれたり、新聞に親しんだりする</p>	<p>6年総合：新聞記事のスクラップ</p>	<p>○新聞を身近なものとしてとらえ、日常的にふれるなかで、読む、感じとる、考える、自分の思いをもつなど、社会的事象への関心を高めることができる。 ○継続的に関わる中で読む力を育むことができる。</p>
<p>新聞記事を読む中で、自分の抱く思いや認識に基づいて自分の立場から相対する立場の考え方や討論し合う</p>	<p>6年国語：学級討論会をしよう</p>	<p>○新聞記事をもとに、いろいろな立場に立って一つのことに對して討論することを通して、さまざまな考えや思いがあることに気づくことができる。 ○相手の立場に基づく考えや思いを聞き、今まで抱いていなかった考えにふれ、自分の立場を修正したり、深めたりすることで、社会認識を深めたり、広めたりすることができる。</p>

※学習活動全般で、扱い時数超過の問題や単元展開の工夫等の課題が残るので、計画的な学習展開が必要となる。

(3) 実践を通して学んできたこと

① スクラップを通して、日常的に新聞に親しむことの大切さ(新聞で学ぶ)

「お気に入りの新聞記事をスクラップしよう」(6年総合的な学習の時間 全3時間扱い)

普段全く新聞を読まないという児童が3分の2、また、3分の1の児童もテレビ欄や自分の興味のあるスポーツ欄に限れているような実態にあった。このような子どもたちに少しでも新聞に興味をもち、新聞に親しんでほしいという願いから、お気に入りの記事をスクラップして、それに対して自分の思ったことや考えたことを短い言葉で記す活動を行った。

ばらばらと目的もなしに新聞をめくっている様子でのスタートであったが、徐々に自分の興味のある記事を読んでいく姿が見られるようになり、子どもたちは様々な記事から、興味ある記事を切り抜いていった。読めない漢字や意味の分からない言葉があると、教師に指示されなくても、自分から辞書をひいて調べる姿も見られるようになった。

そして、新聞記事のスクラップを通して新聞に興味をもつことができるようになり、今まで興味がなかった社会の出来事や動きに対し、関心をもつことができるようになってきた。また、毎日スクラップを続ける児童も増えてきている。

○新聞記事をスクラップしていく活動は新聞に親しみ、興味をもたせるという視点から、大変有効であると感じた。また、個人差はあるが、社会で起きている出来事や動きに対し関心をもつことができた。

○毎日、新聞に目を通し、お気に入りの記事をスクラップする児童もおり、継続的に学習してきている。児童によっては、スクラップの内容に偏りが見られるので、興味や関心をより広げ、社会の出来事や動きに興味を持たせられるような支援を考えていく必要がある。

② 新聞記事を根拠にして話すことよきと支援の大切さ(新聞で学ぶ)

「お気に入りの記事について、スピーチしよう」(6年総合的な学習の時間 全2時間扱い)

相手に分かりやすく伝えられるように、特に自分が興味をもった記事について、なぜ興味をもったのか、その記事を読んでどう思ったのかなどを原稿に書き、スピーチする場を設定した。

子どもたちは、最も自分が興味をもった記事を選び出し、その記事を選んだ理由や思ったこと、考えたことを原稿に書いていった。なかなか書きすすめない子もいたが、記事の中で一番伝えたいことは何か、それを伝えるためにはどのように書いていったらいいかなどを教師が支援することにより、少しずつ書けるようになっていった。

○スピーチ文の原稿を書くことで、自分の感想や考えたことを整理することができ、順序立てて書く力をつけることにつながった。友だちの前で発表し合うことで、どのように話せば相手に伝わりやすいかを考える機会ともなった。

○友だちの発表から、様々な新聞記事にふれることができ、視野を広げることができたと思われる。発表を聞くことを通して、より伝わりやすい発表の方法に気づくことができた児童もいた。

③ 新聞記事を授業に位置づけるための教材化の大切さ(新聞で学ぶ)

「いのちの大切さについて考えよう」(6年道徳 全2時間扱い)

子どもたちは、普段の生活の中で自分自身が友達を支えたり、友達に支えてもらったりすることを見過ごしてきていることが多いと感じる。また、親からの愛も一方的にもらうことを当然のことと考えてきている。そうした現状をふまえ、東日本大震災で多くのクラスメイトを亡くした小6の少女の記事を学習に取り入れ、一人の子どもの命を周りの大人はどれだけ大切に思っているかを感じて欲しいと考え、授業を展開した。

最初に記事を読んだ後、少女を追ったドキュメンタリー番組を視聴した。視聴後の感想記入の際には、何度も新聞記事に目をやりながら、番組の場面と記事の文章や少女のコメントとを照らし合わせるようにしている児童が多くみられた。感想からは、同い年の子の悲しみや力強く生きていこうとする様子を精一杯感じ取ろうと努力する姿がみられた。

○今回扱った記事には、同い年の少女が掲載されていることや少女や周りの大人のコメント

が多く掲載されている。そのことで、出来事と児童の距離が近くなり、児童が相手の心情に迫ろうとする姿勢がうかがえた。新聞は子どもたちにとって難しい内容も多いが、当事者のコメントから出来事に迫っていくと内容をつかみやすくなると感じた。

④ 自らの課題について情報を整理し、発信することの大切さ（新聞をつくる）

「子ども新聞コンクールに出品しよう」

（4年 国語：5時間 総合的な学習の時間：10時間 全15時間扱い）

国語の「新聞を作ろう」の単元学習と、社会科見学のとまとめ学習を兼ねて、総合的な学習の時間で「子ども新聞コンクールに出品しよう」の単元学習を展開した。

社会科見学後、信濃毎日新聞社の畑さんに新聞作りの指導を受けた。新聞の構成を学び、社会科見学の様子をレイアウトした用紙にまとめた。この教室を通して、子どもたちは5W1Hに気をつけて記事を書くことと相手意識を持って文章作りをする大切さに気づくことができた。

新聞教室の後、国語「新聞を作ろう」の学習をする中で、子どもたちは、自分で取材して子ども新聞コンクールに出品したいというねがいをもちた。そして、5W1Hの文章を書くことが難しいので、うまく書けるようになりたいという課題をもちた。そこで、一定期間ではあるが、新聞教室で学んだことの1つである5W1Hに気をつけて記事を書くことに取り組んだ。

取材を伴う新聞作りに取り組むということで、各自がテーマの決め出しに取りかかった。漠然と、取り組んでみたいことはあるのだが、自分の足で取材できることや取材相手確保の見通しを立てることなどの条件もあり、一人ひとりが悩みながらテーマを決めていった。一旦テーマが決まっても、時間的な制約が生じたり、取材相手とのアポが取れなかったりして、自分で予定した通りには進まない子が多かった。家庭の協力を得て、取材先や取材場所への交通の確保等の見通しが立ち、取材ができる内容でテーマが決まった。テーマは、三郷地域を中心にした安曇野市内で、繰り返し、幾度も取材可能な身近な地域の内容がほとんどであった。

取材を始めるに当たり、取材先での交渉を行い、取材日程を決めた。おうちの方や知り合いの助言を受け、各自が自力で取材先と交渉した。

取材前に取材計画を立てた。最初の取材は、大変な緊張を伴ったようである。取材で調べたことを記事にできそうか検討し、不足していることや新たな疑問、深めたい取材内容等について反省し、次の取材に備えた。新たな取材計画を立て、再度アポを取ってという繰り返しをした子が多く、取材回数は、1回が10名、2回が8名、3回が8名、4回が3名、5回が2名と、複数回の取材で記事を作った子がクラスの7割近くいた。

取材をしてよかったこととして、人との関わりの成果、取材時での自分の取り組みの評価、取材で地域の様子や人々の働く姿を知ったり、理解したりしたことなどを挙げる子が多かった。

取材したことをもとに、記事にする内容を5W1Hで表現してみた。先に繰り返し練習してあったので、スムーズに書けた子がほとんどだった。

新聞教室での指導で、複数の記事に順序づけをし、レイアウトに反映させることを学んでいたため、一番記事にしたい記事から並べ替えた。また、相手意識を持って記事を書くために、文体の統一を徹底した。読み手を意識するために、書いた記事を幾度も読み返したり、友だちや担任に読んでもらったりもした。取材が十分でない場合は、夏休み中に追加の取材をした。

ここまでで紙面の構成を学んでいたのので、それに沿って紙面作りをした。見出しや段組をどうするか、写真・図の位置を決めたり、色の使い方を検討したりし、各自の工夫を生かした紙面作りが行われた。

○今回の新聞作りでつける力であった「地域の人々の生き方に学ぶ」ことができた学習活動となった。主体性を持って地域の人と関わり、自分の課題解決のための情報を得ることや関わり方、人とのつながりを実体験することができたことは、日常の学校生活では得られない成果があったと思われる。子どもたちは、地域の姿の一端を知り、地域の方の考えや生き方、悩みなども理解することとなった。また、自分自身を見つめる機会ともなり、新聞作りという新たな試みを通して、自分の成長を感じとった様子もうかがえた。

○自分で得た情報を記事という形に成す作業は、たいへんな労力を要し、多くの工夫や見直しと改善を伴わねばならないことを体験できた。相手意識をもった取り組みを発信することの大切さを感じた子、自分の活動に喜びや楽しさを感じた子、今回の学習を今後の生活に生かそうと考えたりする子もおり、取り組みを自己評価できる学習ともなった。

(4) 事例研究から導き出した実践における工夫(手立て・支援)

- ① 自分の課題に対して調べ、情報を整理させるなかで、自分なりの表現方法を決め出し、表現させる。
- ② 目的意識をもった上でスクラップ活動に取り組むことを通して日常的に新聞記事に親しませ、記事から課題を見出したり、課題に対する自分の考えの根拠を持たせたりする。
- ③ 学習場面によっては、判断させるための資料として、教師の教材化による社会的事象を提示し、課題に対する自身の考えを広めたり、深めたりさせる。
- ④ 情報をもとに、相手意識をもって表現方法を考え相互に発表させるなかで、友だちの考えを聞いて、自分の考えを修正したり、深めたり、新たな考え方にふれさせたりする。

4 公開研究授業

「世界における日本の役割を考えよう」

(6年 社会科:「ともに生きる世界をめざして」全8時間扱い)

社会科単元『ともに生きる世界をめざして』のねらいの一つに「国際協力活動に取り組む人々の生き方に触れるとともに、日本が世界の中で果たす役割について考える」という目標がある。このねらいの達成のために、新聞を活用することで社会の動きとリンクさせながら学習することができるのではないかと考え、単元を展開した。

子どもたちがスクラップした記事を見ると、東日本大震災で被災した方々の様子や海外からの支援部隊の記事が多く見られた。そこで、東日本大震災で多くの国が日本に支援を表明してくれている理由を考えたり、「今まで日本が支援してきたことへの恩返しだ」という記事を読んだりすることを通して、今まで日本が世界で果たしてきた支援や役割に気づいて欲しいと願い、本時を設定した。

東日本大震災が起こったとき、世界約190カ国中、163か国もの国が日本に支援を表明してくれた。子どもたちは、世界の国々と日本との関わりをとらえるために、東日本大震災に着目し、どの国からどんな支援をしてくれたかを新聞記事から読み取っていった。そして、多くの国、団体、個人が日本に支援を寄せてくれていることに気付いていった。

国際社会「日本救え」



13日、東日本大震災の救助活動支援に出席するため、北京の空港で発列した中国の緊急援助隊員ら（ロイター＝共同）

「災害に国境はない」 外交対立抱える中口も

東日本大震災

被災地を支援する日本に、世界は感謝を込めて日本を「救った」と称している。13日の北京で、中国の緊急援助隊員らと日本代表が握手を交わす場面も目撃された。中国代表は「日本は世界に多大な貢献をした」と、日本代表は「中国の緊急援助隊員らに感謝する」と互いに感謝の言葉を交わした。中国代表は「日本は世界に多大な貢献をした」と、日本代表は「中国の緊急援助隊員らに感謝する」と互いに感謝の言葉を交わした。

「災害に国境はない」という言葉が、被災地を支援する日本に、世界は感謝を込めて日本を「救った」と称している。13日の北京で、中国の緊急援助隊員らと日本代表が握手を交わす場面も目撃された。中国代表は「日本は世界に多大な貢献をした」と、日本代表は「中国の緊急援助隊員らに感謝する」と互いに感謝の言葉を交わした。

2011/3/14 信濃毎日新聞



善意集める米の少5少女

募金活動に地域の共感 50万円超

「世界が応援」

米子市立小の5人少女が、米子市で募金活動を行い、50万円を超える募金を集めた。この募金は、被災地への支援に充てられる。少女たちは、地域の共感を呼び、募金活動に積極的に参加した。この募金は、被災地への支援に充てられる。

2011/5/2 信濃毎日新聞

世界から駆けつけた救助隊

① 韓国	救助隊59人 大田市など (3月15-17日)	② イスラエル	医療支援隊 53人
③ ロシア	救助隊144人 石子市など (3月15-19日)	④ フランス	救助隊134人 宮城県名取市など (3月16-23日)
⑤ 中国	救助隊144人 石子市など (3月15-19日)	⑥ 韓国	救助隊107人 山形市 (3月14-23日)
⑦ 南アフリカ	救助隊45人 宮城県岩手市など (3月19-25日)	⑧ ドイツ	救助隊41人 山形市 (3月14-15日)
⑨ トルコ	救助隊32人 宮城県多賀城市など (3月20-4月8日)	⑩ シンガポール	救助隊5人 福岡県相馬市 (3月13-15日)
⑪ 台湾	救助隊28人 名取市など (3月16-18日)	⑫ スイス	救助隊27人
⑬ インドネシア	救助隊16人 宮城県気仙沼市など (3月19-23日)	⑭ 中国	救助隊15人 大船渡市 (3月14-20日)
⑮ メキシコ	救助隊12人 名取市 (3月15-17日)	⑯ モンゴル	救助隊12人 名取市など (3月17-18日)
⑰ コルカタ	医療支援隊4人 福岡県内 (4月25日～)		



工賃3年分恩返し

カンボジア

「私たちが救った」と、私たちが救った。カンボジアの被災地を支援するために、日本企業がカンボジアに工場を建設し、雇用を創出した。この工場は、被災地への支援に貢献している。この工場は、被災地への支援に貢献している。

2011/4/30 朝日新聞

2011/4/30 朝日新聞

学習課題「東日本大震災、なぜ163カ国もの国が日本を支援してくれたのだろうか。」

「人間として助けなければと思った」「津波の映像を見て」「日本に友達がいるから」「今まで日本が支援をしてきたからその恩返し」などの意見が出た。そこで、「恩返し」の根拠となる記事に焦点を当て、その記事を調べた。そして、各国が感謝してくれることとなった今までの日本の活動とはどんなものなのか、新聞記事を通して見ていった。提示した新聞記事から、四川大震災への支援、カンボジアへの支援物資、洪水に見舞われたタイへの支援、コレラ流行に苦しむハイチへの支援、スマトラ沖地震への医療支援などの日本からの支援活動が読み取れた。また、より身近な話題として、三郷小学校出身の方が青年海外協力隊員としてアフリカに出発したこと、カレー販売の収益金を途上国に寄付している駒ヶ根の元青年海外協力隊員のことなども読み取った。

タイの水守る日本の技術



洪水復旧支援 高まる評価

【バンコク通信】タイで洪水被害を受けた地域で、日本が提供した「マイクロバク」の浄水技術が、現地の人々に高く評価されている。タイ政府の要請を受け、10月、日本はタイに「マイクロバク」の浄水技術を提供した。この技術は、洪水被害を受けた地域で、安全な飲料水を確保するために活用されている。現地の人々は、この技術の導入によって、生活の質が向上したと評価している。

微生物の分解作用で汚水を浄化

元青年海外協力隊員 寒天と雑穀使い開発

「健康カレー」で 途上国を支援へ

【駒ヶ根通信】駒ヶ根市出身の元青年海外協力隊員が、途上国を支援するために「健康カレー」を開発している。このカレーは、寒天と雑穀を使用しており、栄養価が高く、消化しやすい。途上国の子どもたちに提供することで、健康を促進し、生活の質を向上させることを目指している。

3月にレトルト発売 小学校建設に収益を活用

安曇野出身の2人 アフリカに出发へ

【アフリカ通信】安曇野市出身の2人が、アフリカに赴き、現地の人々に支援活動を行う。彼らは、現地の人々の生活改善を目的として、さまざまなプロジェクトに取り組んでいる。

2011/6/15 信濃毎日新聞

2011/11/10 信濃毎日新聞

2012/1/6 信濃毎日新聞

2011/6/15 信濃毎日新聞

学習を見返すなかで、子どもたちからは、「今まで世界に認められるほど支援をしてきたから、多くの国が支援してくれた。」「日本も外国もみんな一人ひとり助け合っているのがわかった。」「ユニセフ募金など、協力できることはこれからも続けていきたい。」「日本はこれからも困っている国を助けられる国でいたい。」などの感想が挙げられた。今回の授業では、継続的に新聞記事を使い、学習内容を現実社会とつなげることで意欲的な学習ができることを実感した。

5 研究のまとめ

- (1) 本校におけるN I Eでつける力、ねらいを明らかにして、各学年で実践を積み重ねてきた。新聞を学習に取り入れ、多面的・多角的に考えることで、それまでばらばらなものとして受け止められていた社会的事象を、有機的なつながりに目を向けて考えることができるようになることがわかった。そして、自分のもつ社会認識を深め、広げることができるということを見出すこともできた。ただ、学習場面や課題解決に向かう適切な資料や記事が必要となるので、教師の教材化が重要となる。
- (2) 継続的にスクラップに取り組む中で、新聞を読む力、見出しを活用して内容を的確につかむ力、内容をすばやくまとめる力が身についていくことがわかった。学習の目的に応じて期間を区切る等の配慮をしながら続けたい。
- (3) 新聞活用の3つの分野の学習を繰り返していくことで、新C Sで大切にされている、「考え、判断し、表現する力」を培えるというN I Eの有用性が明らかになった。
- (4) 研究の内容である「本校におけるN I E実践と新聞を活用した学習をすえていくために考え、取り組んだ点」は、具体的な学習場面を明らかにし、実践するなかで、そのよさと課題をとらえてあるので、今後のN I E実践に役立てることができると考えられる。

6 残された課題

教科・領域、学習内容によっては、新聞記事を補助教材として生のまま与えても学習効果が上がる。しかし、児童の実態と学習内容によっては、新聞記事を資料として与えていく際に、新聞記事そのままではなく、学習のねらいや展開、子どもたちの実態に応じて、加工が必要になると考えられる。今後は、その加工の仕方についても教材化していく研究が必要になると思われる。